

“日本発” グローバル発信例

～英語・文学教育の“国際化”～

寺西 雅之

0. はじめに

日本国際教養学会では、設立以来グローバル人材育成の重要性とその具体的方策が追究されてきた。シンポジウム「国際社会を生きる―日本発―グローバル発信例に学ぶ」では、これまでの成果を踏まえ、多様な分野で展開されている「日本発」グローバル発信例を取り上げ、国際社会において日本が主体的な役割を果たすために必要な能力、戦略、心構え等について具体例を交えて論じ合った。この発信例の一つとして、本発表では、Palgrave Macmillan より 2015 年に出版予定の *Literature and Language Learning in the EFL Classroom* (寺西雅之、斎藤兆史、Katie Wales 編著) を取り上げ、その企画から出版決定までのプロセスを紹介し、世界に向けた“日本発”の出版の重要性と今後の課題・可能性について論じた。

1. グローバル人材と英語

本発表ではまず、「グローバル人材」にとって不可欠と見なされている英語の重要度に関して、文体論的考察も交えて論じた。Carter & Nash (1990)は、文学性 (literariness) を示す指標の一つとして、「言語以外の媒体への依存度」‘medium dependence’ を挙げている。これは、文学性の高い発信や、文学性が求められる分野においては、可能な限り言葉による説明・表現・意志伝達を行うため、動画、画像、図表といった言葉以外の媒体には頼らないという傾向を示した用語である。英語を母語としない日本人が文学分野での発信を英語で行う場合、言葉への依存度＝英語への依存度が高まり、難易度も高くなる一方、効果的な意志・情報伝達のために映像・図表など言葉以外の媒体を活用したグローバルな発信では、英語への依存度は相対的に低くなると言える。以上の点より、グローバルな発信においても英語の重要度は分野や発信内容によって異なる (グローバル人材＝英語とは限らない) 点を確認し、さらに本発表で扱う英語・文学教育という分野でのグローバル発信における英語の役割に関しても考察を加えた。

2. *Literature and Language Learning in the EFL Classroom* について

次に、本発表の主題である著書 *Literature and Language Learning in the EFL Classroom* について、その編著者・執筆者および予定されている内容を紹介した。この論文集は、日本人がイニシアティブをとり、イギリス、オランダ、中国の研究者と日本で教鞭を取っているアメリカ人研究者が参加する「グローバル」な企画であり、その趣旨は執筆者の一人である Gillian Lazar 氏の言葉に示される通りである。

[...] while I am generally supportive of global trends, I personally believe that we should not lose sight of the specifics of more local cultural contexts. In this sense, if the book manages to link both of these, I think it will be a really interesting contribution to the literature. (筆者あての電子メール (2013 年 11 月 7 日受信) より引用)

本著が、国際社会において諸外国の人々と対等に渡り合えるだけの英語力を要求する「グローバル」な視点と、各国の教育現場の実情を踏まえてそれぞれの学習者が学びの段階で経るべきプロセスを重視する「ローカル」な視点との有機的な融合を目指すものであることを論じた。

3. 出版までのプロセス

次に *Literature and Language Learning in the EFL Classroom* の出版が決まるまでの過程を紹介した。本プロジェクトは、科学研究費補助金による研究「文学作品を用いた英語教育の教授法と教材の開発に関する研究」(基盤研究 (C)) のメンバーが主体となり、国内においては本学会や日本英文学会、JACET 文学教育研究会において、また海外では TESOL や国際文体論学会 (Poetics and Linguistics Association) などの学会活動を通じて蓄積された研究成果をまとめる研究論文集となる予定である。本シンポジウムでは、本著が、海外の研究者・教員・学生を中心とするグローバルな読者に対して発信される点を説明し、その実現のために築かれた諸外国の著名研究者との協力体制や、出版社を選定し、交渉を進めていった過程等を、実際のメールによるやりとりなども交えて紹介した。特に、企画段階において出版社に提出する申請書 (Book Proposal) の作成に関して、「説得力」と

「読者の視点(reader-friendliness)」の重要性について詳しく論じた。さらに、国際的に評価の高い出版社から出版する際に最後のハードルとなる外部審査をクリアするための対策に関して、実体験をもとに分析を行った。

4. プロジェクトを通じての発見

次に、これまでの出版プロジェクトの活動を通じての発見について、グローバルな出版業界の動きと、それに対して日本人研究者が取るべき態度に絞って論じた。これまでの出版社および研究者とのやりとりを通じて得られた最大の発見は、日本からの発信が世界から求められているという事実であり、そのことは下記の Geoff Hall 氏(The University of Nottingham Ningbo China 教授、国際誌 *Language and Literature* 編集長) の言葉に典型的に示されている。

[...] I had a meeting with our publishers in London and they complimented the journal (*Language and Literature*) on being more international than most and not only publishing UK and North American authors. (筆者あての電子メール (2012年8月13日受信) より引用)

その他に、今回の出版プロジェクトを審査した外部審査員のメッセージなども交えながら、日本人が海外読者に向けて英語で発信していくことへの評価とその意義に関して考察を加えた。

5. まとめ：世界に向けて発信する意義

まとめとして、今回の“日本発”グローバル発信例の意義を要約し、これからのグローバルな発信に課せられるであろう課題を取り上げた。まず、世界の読者に向けて発信する試みを通じて、当該分野の世界的潮流を再認識できる点を強調した。次に、世界の読者を対象にすることにより「新しい視点」と「発想の転換」が求められることを指摘し、これらの「外圧」をいかに自発的な原動力に置き換えることができるかが、グローバル発信の成功への鍵となることを指摘した。最後に、日本発の発信が世界より求められている一方で、日本の価値観とグローバルな価値観は必ずしもかみ合わないという事実に言及し、日本人として「譲れない主張」を、諸外国との摩擦を乗り越えながら発信することの重要性を強調した。さらに、この難問題をクリアするためのより良い具体策の発見が、今後の検討課題となるべきであることを強調し、本発表を締めくくった。

参考文献

Carter, R. and Nash, W. (1990) *Seeing Through Language: A Guide to Styles of English Writing*. Oxford: Blackwell.